

番号・課題名	12 島しょ牧野における暖地型シバ品種の利用 ～食の安全をめざして島しょ牧野で健康な牛を育てます～
所属・氏名	三宅分場 坂田雅史、井上和典、太田久由

〔目的〕

伊豆諸島公共牧野においては、従来より寒地型牧草主体の草地で牛の放牧が行われてきた。寒地型牧草は栄養価は高いが、夏期に衰退し、温暖な気候に適する植生の侵入を受け牧養力が低下する。このため草地の更新が短いサイクルで必要となり、草地の維持負担が大きく、経営的に公共牧野の維持が困難となる。そこで、温暖な地域に適合するシバ品種の導入により、維持経費の少ない低投入持続型の牧野の造成を検討する。また同時に冬期については周年放牧利用技術の検討も併せて実施する。

〔方法〕

1. シバ型品種の検討

ノシバ3品種（千葉ラフワン、朝駆、朝萌）を導入しその特性を調査している。（図1,2,3）

千葉ラフワンは増殖速度が速いと同時に草丈が他の品種と比べて高く牧養力に優れるものと推測された。

朝駆は増殖速度が速く、裸地を覆うには最も優れた品種である。

朝萌は緻密なソッドを形成し雑草の侵入を防止するのに効果があると思われる。

その他の品種

カーペットグラスは八丈牧野において利用されているが、寒気の襲来により死滅すると言われている。そこで冬季に寒気が強く霜が降りる青梅圃場において越冬性を見たが、約40%程度死滅する。他のシバ型品種との組み合わせ利用が最適と思われた。（図4）

センチピートグラスにおいても寒気が問題となるが、青梅地域での越冬性については問題がなく伊豆諸島では十分利用可能と思われた。

2. 増殖法

厳しい火山性土壌条件においては一般の牧草地に比べ急速な増殖は困難である。このような状況の中で、ポット苗法、マクロシード法、緑化工法の利用など増殖に有利な方法検討を要する。現在ポット苗でノシバを八丈牧野に定植し、その効果を判定中である。また、暖地でアジサイなどの放牧利用性のない植生の侵入が八丈牧野で懸念されるのでその防止を含めて、ポット苗によるセンチピートグラスの増殖を測定し、平方メートル当たりの定植数を9本とすることが必要であると判断された。（図5）

3. 周年放牧利用型草種の選定とその造成方法について

暖地型シバ型草地の周年利用で問題となるのが育成牛の冬期間の放牧である。この目的で、ウィンターオーバーシード、秋期立毛貯蔵による寒地型牧草の検討を行う必要がある。今回は冬季において生育性の良い品種の選定とその造成方法について検討したが、マクロシードペレットによる方法が適すると考えられた。冬期間の生育も各草種の品種によっても異なっているため、今後島嶼の条件による最適な品種の選定が必要である。（図6）

〔結果〕

ノシバ品種の比較

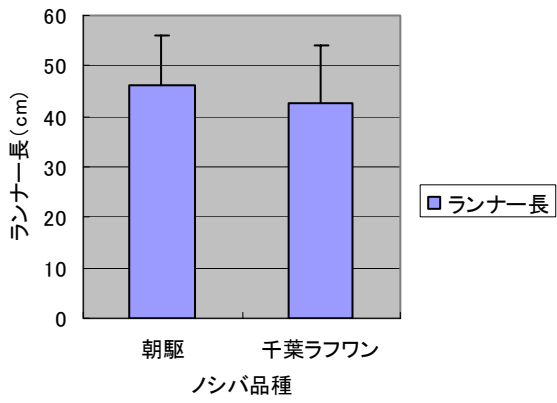


図1. ランナー長の比較

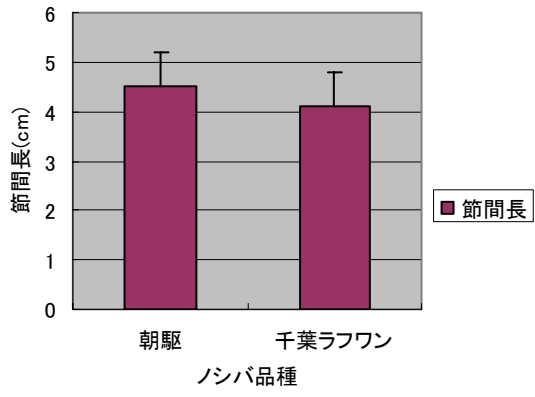


図2. 節間長の比較

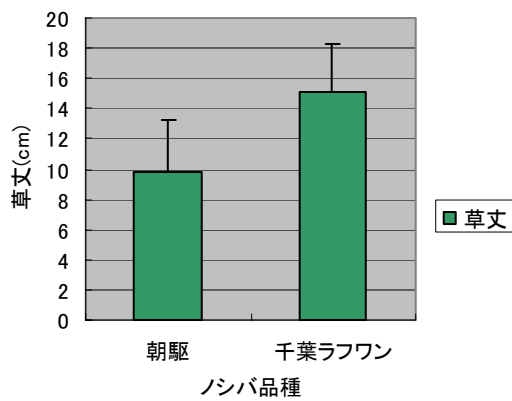


図3. 草丈の比較



図4. カーペットグラスの冬期生存性

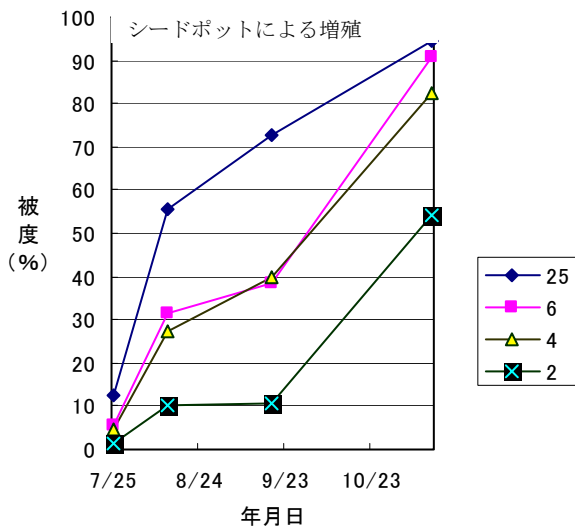


図5. センチピート被覆度



図6. 八丈島牧野マクロシードペレット
(ペレニアルライグラス ヤツナミ)